

研 究

新潟中越地震災害が夫婦関係やストレス、
子どものメンタルヘルスに与える影響久保 恭子¹⁾, 後藤 恭一²⁾, 宍戸 路佳³⁾, 坂口由紀子⁴⁾
田崎知恵子⁵⁾, 石舘美弥子¹⁾, 草間真由美⁶⁾

〔論文要旨〕

目 的：新潟中越地震災害が夫婦関係やストレス、子どものメンタルヘルスに与える影響を明らかにし、必要な看護を明らかにする。

対象と方法：新潟中越地震発生から7年後、被災経験のある1,419人の母親に質問紙調査を行った。

結 果：調査対象者の多くは災害後も良好な夫婦関係を継続していた。しかし、多数ではないものの、災害後、配偶者と夫婦関係が悪くなった者のほうが有意に不安、抑うつ得点が高く、母親は「災害後、夫が頼りにならない」と感じていた。また、夫婦関係が悪化したケースの子どもは、その後に発生した災害時に必要以上におびえていた。さらに、重回帰分析から、母親のストレスに最も関連しているものとして「世間からの孤立感」があった。

考 察：母親は災害という重大な危機状況の時、夫を頼りにしたい存在として捉えている。しかし、災害は夫にとっても、重大な危機状況であり、妻が望むようなサポートや行動が夫にできるとは限らないだろう。このことは、母親にとって信頼できる相談相手を失ったような気持ちになり、孤立感を持っている可能性がある。今後の看護として、夫婦間関係の調整を含めた支援のあり方を検討しつつ、母親の孤立化を防止するような対策が必要であり、インターネット相談などの活用も検討が求められる。

Key words：新潟中越地震災害、夫婦関係、母親のストレス、子どものメンタルヘルス

I. 緒 言

2011年3月11日に起きた東日本大震災は大きな人的・物的被害をもたらし、災害後の復興については、日本国内のみならず、世界中の人々が関心を集めている。近年、国内外において、甚大な災害が多発し、私たち看護職者は誰もが災害時の看護に関わる可能性がある。著者らは長く母子看護に携わり、支援をして

きた。子育て期の家族は、結婚・出産・育児と人生のライフイベントが短期間に集中し、子育て期の家族というだけでも健康危機が生じやすい。このような危機的状況にある家族が被災体験をすることにより、より健康危機が生じやすく、家庭の安定への支援が、われわれ看護職に求められ、このことは看護学の課題ともされている^{1~3)}。先行研究では、被災後の支援として、対象者を個人から家族単位として捉え、支援するこ

Effects of Niigata-chuetsu Earthquake Disaster on Marital Relationship,
Mothers' Stress and Children's Mental Health, and Clarification of Support Needed
Kyoko KUBO, Kyoichi GOTO, Mika SHISHIDO, Yukiko SAKAGUCHI, Chieko TAZAKI, Miyako ISHIDATE,
Mayumi KUSAMA

〔2530〕

受付 13. 5.15

採用 13. 8.26

1) 横浜創英大学看護学部看護学科（看護師／研究職）

2) 航空研究所（研究職）

3) 横浜創英大学看護学部看護学科（助産師／研究職）

4) 日本医療科学大学（看護師／研究職）

5) 日本保健医療大学（看護師／研究職）

6) NPO 法人 子どもの虐待防止ネットワーク・にいがた（NPO 代表）

別刷請求先：久保恭子 横浜創英大学看護学部看護学科 〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町1番地

Tel/Fax：045-922-6043

とが被災者の QOL の向上につながることが明らかになっているが⁴⁾, 具体的な方法を示した報告は極めて少ない。また, 災害が夫婦関係に与える影響や夫婦関係とストレスに関する研究も極めて少ない。

本研究の目的は, 被災家族の中でも子育て期の母親を対象に, 夫婦関係に着目し, 被災家族への看護を検討する資料を得ることである。発達心理学分野における先行研究では夫婦関係が子育てに影響を及ぼすことが明らかになっている⁵⁾。災害という危機的状況が夫婦関係にどのような影響を及ぼすかが明らかになれば, 子育て期の被災家族の理解と効果的な看護のための知識を得ることができる。看護基礎教育の中で, 2009年のカリキュラム改正に伴い, 災害看護学が必修科目となった。多くの看護師が災害看護について学習が必要であり, 多発する災害への対応として, 私たち看護職が, 家族全体を一つの単位とした支援をすることは, 被災家族の QOL の向上に寄与し, このことは, 母子看護学, 災害看護学の発展にもつながる。

II. 研究方法

1. 対象者と方法

新潟中越地震発生から7年後, 被災した母親2,300人を対象に質問紙調査を実施した。調査期間は2011年2月から3月10日までである。質問紙の内容は, 基本属性(年齢, 家族構成), 災害後に伴う被害状況(居住地や家族構成の変化, 仮設住宅の使用経験, 家屋の損壊等), パートナーおよび子どもとの関係, 養育態度, 飲酒, 喫煙習慣, ストレスについてはGoldbergの不安・抑うつ尺度(日本語版)等で構成した⁶⁾。Goldbergの不安・抑うつ尺度は, Goldberg D. によって開発された一般健常人を対象とした不安抑うつ尺度である。不安, および抑うつともに9項目で構成され, 過去1週間の心身の状態について, 「はい・いいえ」で回答を求めるものであり, 川上, 今中によって日本語化されている。標準化された精神科面接との比較では, 本尺度の鋭敏度は91%, 特異度は86%と信頼性・妥当性が示されている。本集団において, アルファ係数を算出したところ, 不安は0.757, 抑うつは0.752であった。これらの質問紙は小児看護学, 家族看護学, 臨床心理学, 発達保育心理学の研究者らからスーパーバイズを受けて作成をした。

2. 倫理的配慮

調査の趣旨を説明し, 対象者の参加は自由意志に基づくものであること, 質問紙の内容で回答したくない質問には回答しなくてもよいこと, 研究協力の有無が対象者の生活などに一切影響を受けず, 不利益を被らないこと, 無記名であること, 研究終了後, 速やかに破棄をすること, 個人・家族が特定できる情報は論文等に一切載せないことを文書で説明をした。また, 質問紙の返信をもって, 本研究の同意を得たものとすることも併せて明記した依頼文を同封した。なお, 本研究はA県内のB・C市の行政等からの助言・後援を得て実施した。

3. 分析方法

夫婦関係(不仲・良好), さらに夫婦関係が不仲な者についてはその時期(地震前・後)を2群に分けて各ストレス(不安, 抑うつ)得点の差異についてt検定により検討した。また, 夫婦関係の不仲の時期と子ども(第一子)との関連性をカイ二乗検定を用いて検討した。飲酒・喫煙習慣とストレスの関連性についてはSpearmanの順位相関により検討した。さらに, 震災中に体験した各出来事とストレスの関連性について, 各種経験および年齢を独立変数, 各ストレス得点を従属変数とする重回帰分析(stepwise法)を行った。解析には統計パッケージSPSS(Ver.18.0J)を使用した。統計学的検討にあたっては有意水準を5%として判断した。

III. 結果

1. 対象者の概要

1) 対象者属性

回収は1,419人(61.7%), うち母親1,346人(94.9%), 父親73人(5.1%)であった。今回の分析の対象者(以下, 対象者)は母親のみとした。対象者の平均年齢は39.2歳(範囲25~62歳)であった。子どもの人数は1人:158人, 2人:751人, 3人:372人, 4人:50人, 5人:10人であり, 2人が最多であった。子どもの平均年齢は, 第1子:11.7歳, 第2子:8.9歳, 第3子:7.3歳であった。家族構成は, 夫婦と子どもの核家族845人, 拡大家族355人, 母子家族は146人であった。災害後, 家族に変化があったと回答した人は383人で, その多くが第2子, 3子が生まれたという内容であった。災害後, 居住地の変化があった人は269人であった。

2) 災害時の家屋の被害について

災害時、家屋の被害があった人は1,008人（75.4%）であり、一部被害818人、半壊116人、大規模32人、全壊39人であった。また、仮設住宅の利用をした人が41人、現在でも、家屋の心配があると回答した人は359人であった。

3) 母親の養育態度について

以下の8項目について、「はい、いいえ」で回答を得た。子どもと一緒にいるとイライラする：390人（28.9%）、なにかと子どもにあたってしまうことがある：419人（31.1%）、子どもの不機嫌な様子に対応したくないことがある：630人（46.8%）、子どもの世話が面倒になることがある：396人（29.4%）、子どもを大声で怒鳴ったり、つねったり、たたきたくなることがある：532人（39.5%）、子どもが可愛いと思えないときがある：168人（12.4%）、食事を作りたくないときがある：784人（58.2%）、親子関係がしっくりしない気がする：127人（9.4%）が「はい」と回答した。

4) 第1子の子どもの様子・メンタルヘルスについて

以下の7項目について、「はい、いいえ」で回答を得た。親から見て精神的に不安定な様子がある：189人（14.0%）、いじめなど、友人関係に悩んでいるようだ：77人（5.7%）、不登校、登校しぶりなどの問題

がある：32人（2.3%）、地震などの災害に必要以上におびえる：109人（8.0%）、そろそろして落ち着きがなかったり、集中力がない：181人（13.4%）、時々、気分が沈んでいるようだ：144人（10.6%）、特定の場所を怖がる：82人（6.0%）が「はい」と回答した。

5) 母親の相談者の有無について

相談者がいる人は1,236人（93.4%）であった。相談者の内訳は（複数回答あり）夫：883人（71.4%）、友人：877人（70.9%）、実の両親：830人（67.1%）、義理の両親：254人（20.5%）、きょうだい：373人（30.1%）、親戚：69人（5.5%）、近所の人：149人（12.0%）、保育園の先生：162人（13.1%）、医療機関：21人（1.6%）、保健師：14人（1.1%）、スクールカウンセラー：12人（0.9%）等であった。

2. 夫婦関係とストレスの関連

1) 夫婦の仲とストレスの関連（表1）

夫との仲について集計すると、うまくいっている（以下、良好）：1,061人（78.8%）、あまりよくない（以下、不仲）：167人（12.4%）であった。そこで、夫婦仲の「良好・不仲」の2群間のストレスの差異について、2群に年齢差がないことを確認し、t検定を行った。その結果、配偶者と不仲の者は有意に不安、抑うつ得点ともに高かった。なお、災害後、離婚された方は52人であった。また、夫からの暴力があるという人は39人であった。

2) 不仲の時期とストレスの関連（表2）

夫婦関係が不仲の者を対象に、その時期について「地震の前後」で集計すると、地震前：88人、地震後：54人であった。先の検討と同様に、2群間に年齢差がないことを確認し、t検定を用いて検討したところ、地震後に配偶者と不仲になった者のほうが有意に不安、抑うつ得点が高かった。なお、夫婦関係が悪くなった群の母親が、災害後にどのような変化があったのかという自由記述を見ると（複数回答あり）、「夫が頼りにならない」などの夫とのコミュニケーションに関することが12件、「仕事がなくなり、経済的に苦しい」が

表1 夫婦の仲とストレスの関連

	配偶者との仲	N	平均値	標準偏差	有意確率
不 安	不仲	167	2.13	2.60	.000
	良好	1,061	0.86	1.79	
抑うつ	不仲	165	1.79	2.39	.000
	良好	1,060	0.55	1.37	

表2 不仲の時期とストレスの関連

	配偶者との不仲の時期	N	平均値	標準偏差	有意確率
不 安	地震前	88	1.44	2.19	.001
	地震後	54	3.09	3.01	
抑うつ	地震前	87	1.49	2.04	.029
	地震後	53	2.53	2.99	

表3 配偶者との不仲の時期と「第1子が地震などの災害に必要以上におびえる」との関連

		地震などの災害に必要以上におびえる	
		いいえ	はい
配偶者との不仲の時期	地震前	46 (82.1%)	10 (17.9%)
	地震後	86 (94.5%)	5 (5.5%)

統計学的有意差検定：χ²検定（Fisherの直説法により正確有意確率（両側））有意確率 .024

表4 災害に伴う各種経験とストレスとの関連

従属変数	独立変数	標準化偏 回帰係数	有意確率	共線性の統計量	
				許容度	VIF
不安	子どもといると（見ると）イライラすることがある	0.056	0.288	0.626	1.597
	なにかと子どもにあたってしまうことがある	0.247	0.000	0.648	1.542
	子どもの不機嫌な様子に対応したくないことがある	−0.012	0.804	0.691	1.448
	子どもの世話が面倒になることがある	0.096	0.064	0.653	1.531
	子どもを大声で怒鳴ったり、つねったり、たたきたくなることがある	0.027	0.582	0.745	1.343
	子どもが可愛いと思えないときがある	0.001	0.976	0.706	1.416
	食事を作りたくないときがある	0.035	0.450	0.834	1.200
	親子関係がしっくりしない気がする	0.125	0.007	0.822	1.217
	年 齢	0.097	0.022	0.974	1.027
抑うつ	子どもといると（見ると）イライラすることがある	−0.007	0.901	0.626	1.597
	なにかと子どもにあたってしまうことがある	0.147	0.006	0.648	1.542
	子どもの不機嫌な様子に対応したくないことがある	0.095	0.064	0.691	1.448
	子どもの世話が面倒になることがある	0.063	0.235	0.653	1.531
	子どもを大声で怒鳴ったり、つねったり、たたきたくなることがある	−0.110	0.027	0.745	1.343
	子どもが可愛いと思えないときがある	0.056	0.274	0.706	1.416
	食事を作りたくないときがある	0.002	0.965	0.834	1.200
	親子関係がしっくりしない気がする	0.196	0.000	0.822	1.217
	年 齢	0.125	0.004	0.974	1.027
不安	親から見て精神的に不安定な様子がある	0.038	0.452	0.704	1.420
	いじめなど、友人関係に悩んでいるようだ	−0.026	0.565	0.866	1.155
	不登校、登校しぶりなどの問題がある	0.184	0.000	0.928	1.077
	地震などの災害に必要以上におびえる	−0.040	0.399	0.836	1.196
	そわそわして落ち着きがなかったり、集中力がない	0.053	0.250	0.853	1.172
	時々、気分が沈んでいるようだ	0.126	0.012	0.722	1.386
	特定の場所を怖がる	0.133	0.005	0.814	1.229
	年 齢	0.058	0.179	0.978	1.023
抑うつ	親から見て精神的に不安定な様子がある	0.123	0.018	0.704	1.420
	いじめなど、友人関係に悩んでいるようだ	−0.064	0.170	0.866	1.155
	不登校、登校しぶりなどの問題がある	0.138	0.002	0.928	1.077
	地震などの災害に必要以上におびえる	0.013	0.779	0.836	1.196
	そわそわして落ち着きがなかったり、集中力がない	−0.034	0.472	0.853	1.172
	時々、気分が沈んでいるようだ	0.088	0.085	0.722	1.386
	特定の場所を怖がる	0.051	0.286	0.814	1.229
	年 齢	0.138	0.002	0.978	1.023

従属変数：不安・抑うつ得点，独立変数：各質問および年齢とした重回帰分析の結果。
各質問は、「はい」の回答を1点、「いいえ」の回答を0点とコーディングした。

4 件，「子どもが発達障害であり，災害後，まっすぐ歩けない」，「こだわりが強くなった」，「新しい場所を怖がる，奇声をあげる」，「もともとあった自閉的な症状がひどくなった」，「子ども自身が精神的に不安であり，子育てが大変である」の 5 件，「市役所に相談に行っても事務的で，話にならない」，「母子保健推進委員，保健師などの人柄が問題」，「レベルアップが必要である」がそれぞれ 4 件あった。

3) 夫婦関係と子ども（第 1 子）との様子について

夫婦関係が悪化した時期と「親から見て精神的に

不安定な様子がある」，「いじめなど，友人関係に悩んでいるようだ」，「不登校，登校しぶりなどの問題がある」，「地震などの災害に必要以上におびえる」，「そわそわして落ち着きがなかったり，集中力がない」，「時々，気分が沈んでいるようだ」，「特定の場所を怖がる」の 7 項目との関連をカイ二乗検定で検討した。その結果，災害後，夫婦関係が悪くなったケースで，子どもが災害時に必要以上におびえるということがわかった（表 3）。

3. 飲酒、喫煙習慣とストレスの関係について

母親の孤独感やストレスコーピングに関する質問回答を集計したところ、世間から孤立していると感じることがある：124人（9.2%）、お酒を飲む：729人（54.1%）、災害後の飲酒量が増加した：31人（2.2%）、お酒の量は変わらない：613人（43.2%）、飲酒量が減った：3人（7.6%）、タバコを吸う：200人（14.8%）、災害後、その喫煙量が増えた：9人（0.6%）、変わらない：157人（11.1%）、減った：34人（12.3%）であった。災害後における飲酒・喫煙習慣とストレスの関係について検討した。飲酒・喫煙について「災害後に」増加したを1、変わらなかったを0、減ったを-1とそれぞれ得点化し、ストレス得点との関連性をスピアマンの相関分析にて検討したところ、不安得点と災害後飲酒量の増加のみ、統計学的に有意な正の相関が認められた。

4. 災害に伴う各種経験とストレスの関連性について

災害に伴う各種経験（体験や出来事）とストレスとの関連性、どのような経験が心的負担となっているか、重回帰分析を用いて検討した。重回帰分析の従属変数にはメンタルヘルスを、独立変数として「配偶者との仲の善し悪し」、「震災後離婚」、「相談者の有無」、「仮設住宅経験の有無」、「家族構成の変化の有無」、「居住地の変化の有無」、「家屋の心配の有無」、「パートナーからの暴力の有無」、「世間から孤立を感じているか否か」、「家屋被害の有無」、および「年齢」を投入した。変数選択はstepwise法を用いた。重回帰分析の結果を表4に記す。独立変数間の相関係数は最も高いものでも-0.322と中程度以下であること、VIF値も1前後であることから多重共線性の問題はないと考えられた。

不安には、「世間から孤立していると感じることがある」、「家屋の心配の有無」、「夫からの暴力がある」、「震災後離婚した」、「配偶者との仲が悪い」が有意に関与し、最も「世間からの孤立」の寄与が高かった。他方、抑うつには、「世間から孤立していると感じることがある」、「相談者がいない」、「配偶者との仲が悪い」、「パートナーからの暴力がある」、「震災後離婚した」、「家屋の心配の有無」が有意に関与し、「世間からの孤立」が最も寄与していた。

IV. 考 察

先行研究では震災後の二次的ストレスが大きく、社

会的な支援が十分に提供されない人々の場合、PTSDの発生が高くなることを報告している⁷⁾。今回の調査でも、ストレスの高い母親は「相談相手がいない」、「世間から孤立している」など人的支援が不十分であったことが推測でき、先行研究の結果を支持するものであった。また、今回の自由記述の結果から、災害後の発達障害児の育児について、困難感を持つ親が多いことがわかった。近年、小児保健の領域では、発達障害児とその家族への支援について研究が盛んに行われてきている。しかし、発達障害児と災害に関する具体的な研究論文は多くはない。今後、災害が発達障害児にどのような影響を与えるのかを明らかにし、子どもやその家族の特性に合った支援の方法を確立していく必要がある。また、子どもの様子が「親から見て精神的に不安定な様子がある」、「そわそわして落ち着きがなかったり、集中力がない」、「時々、気分が沈んでいるようだ」と回答した人数が多い。新潟県では災害1週間後から現在においてもスクールカウンセラーが積極的に子どもたちとその親をサポートしている。今後も継続的な支援と、有効な支援方法を探る必要がある。

本調査の結果から新たに明らかになった点は、夫婦関係が母親のストレスや子どものメンタルヘル스에影響し、重回帰分析の結果から、このような母親は孤立感を持っていることである。母親のストレスの低減には夫婦のあり方も含めて考える必要があることが示唆される結果である。災害時、夫が頼りにならないという自由記述にあるように、母親は災害という重大な危機状況の時、夫を頼りにしたい存在として捉えている。しかし、災害は夫にとっても、重大な危機状況であり、妻が望むようなサポートや行動が、遂行できるとは限らない。このようなケースにおいて、母親は最も身近で信頼できる相談相手を失ったような気持ちになり、孤立感を持っているのではないだろうか。このような心細さは母親のストレスに大きく影響することは当然である。今後の看護のあり方として、私たち支援者は、孤立している母親を学校や保育所、幼稚園、健診等の各場所から見つけ出し、孤立化を防止する対策が必要である。被災地の中でも、山岳地域等のある限られた地域によっては隣人、近所、学校関係者、行政の支援者らが母親やその夫にとって極めて親しい関係にある場合もあり、家庭内のこと、夫婦関係のことを地域における支援者に相談しにくい場合もある。今後、第三者の専門職者の介入の検討や、頻回な訪問が難しいよ

うな地域では、比較的低価格で簡単な操作で利用でき、顔が見えず、匿名性が守られるような電話相談やインターネット相談などの活用も検討し、母親が自分の気持ちを表出ができ、孤立感を持たないような支援が求められる。また、父親が母親の心情をどのように認識しているのかも、明らかにしていく必要がある。さらに、メンタルヘルスに問題のある母親は飲酒量が増加する傾向にあった。今後、母親のストレス解消法なども提供していく必要がある。

V. 結 論

夫婦関係と母親のストレス、子どものメンタルヘルスとは関連があり、特に災害後に夫婦関係が悪化したケースは母親のストレスが高く、その子どもも災害時に必要以上におびえる傾向がみられた。さらに、重回帰分析から、母親のストレスに最も関連しているものとして「世間からの孤立感」があった。今後の看護として、母親の孤立化を防止するような対策が必要であり、インターネット相談などの活用も検討が求められる。

謝 辞

本研究にご協力をいただきました皆様に感謝をいたします。また、Goldbergの不安・抑うつ尺度の日本語版を提供して頂きました川上憲人先生、今中雄一先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。

本論文の一部は第58回日本小児保健学会、第52回日本母性衛生学会にて発表した。

本研究は文部科学省研究費補助金基盤研究(B)(課題番号22390414 代表 久保恭子)を受けて研究をしたものである。

本研究は、利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Sally H, Rankin. Family transitions. Toward a science of family nursing, 1989 : 173-186.
- 2) Schumacher K L, Meleis A I. Transitions-A Central Concept in Nursing. Journal of Nursing Scholarship 1994 ; 26 : 119-127.
- 3) 山本多喜司, Wapner S. 人生移行の発達心理. 京都府: 北大路書房, 1991 : 15-24.
- 4) 及川裕子, 久保恭子, 田村 毅, 他. 三宅島噴火災害, 被災家族におけるメンタルヘルスと子どもの成長発達. 文部省科学省研究費補助金基盤研究(B)(2)

18390575, 2007.

- 5) 田村 毅, 倉持清美, 久保恭子, 他. 子育て家族システムの特徴と育児支援相談プログラムの開発報告書. 文部科学省研究費補助金基盤研究(B)(2) 16300229, 2008.
- 6) Goldberg D, Bridges K, Duncan-Jones P&Grayson D. Detecting anxiety and depression in general medical settings, BMJ 1988 ; 298 (8) : 897-899.
- 7) 近澤範子. 災害による心理的影響と回復過程への支援—文献検討に基づく考察, 看護研究 1998 ; 31 : 49-61.

[Summary]

Purpose : The purpose of this study was to clarify the effects of the earthquake disaster on marital relationship, mothers' stress and children's mental health, and then clarify what kind of care was needed.

Method : A questionnaire survey of 2,300 mothers was conducted.

Results : The anxiety and depression scores were found to be significantly higher in the group of mothers who answered the relationship with their spouses became worse after the earthquake disaster. Children of such couples were found to have been excessively scared when the disaster happened. There was a correlation between mothers' stress coping and increase of their amount of drinking. The multiple regression analysis showed that a feeling of isolation from the society was the factor most strongly connected to mothers' stress.

Consideration : In a serious crisis of disaster mothers regard the spouses as ones they really want to rely on. However, the spouses cannot always form a support and take action as mothers expected because the disaster also makes the spouses uneasy. Under such circumstances, mothers may feel isolated as if they lost the sole partner they had believed to be the closest and the most reliable. To care for those mothers, some measures to prevent the mothers from feeling isolated should be taken, for example by using the Internet counseling.

[Key words]

niigata-chuetsu earthquake disaster, marital relationship, mothers' stress, children's mental health